

奨励

美しい人イエス

奨励	宇山 進〔うやま・すすむ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団牧師

イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことが、悪を行うことか。命を救うことが、殺すことか。」彼らは黙っていた。そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

(マルコによる福音書 3章1—6節)

神学部に入ったけれど

私は44年前に同志社大学大学院神学研究科修士課程を修了して牧師になりました。しかし、私は高校時代には、将来、美術あるいは芸術関係に進みたいと思っていました。ところが、高校2年生の春に、友だちと2人で乗っていたボートがひっくり返って、その友だちが水の中で心臓麻痺を起こして亡くなり、私は九死に一生を得て助かったということがありました。そのことによって、私は人の命の儚（はかな）さを感じ、またその友だちが亡くなったことに悲しみを抱くよりも、自分がこんな目に遭っていやだなあという思いの方が強かったことに気付いて、罪の意識を持ち、私は幼いころから教会に通っていたのですが、その年に神様への信仰を告白して洗礼を受けました。

その後も将来の希望は変わっていなかったのですが、高校3年の秋に、私が通っていた教会とはちがう教会の高校生2人が、「僕たちは来年同志社大学神学部に入って、将来牧師になります」と言うのを聞いて、「そんな道があるんだ」と思い、急きょ方向転換して、翌年、私もその2人と一緒に同志社大学神学部を受けて入学しました。それで4年生まで進んだのですが、美術や芸術への関心が無くなっていったわけではありませんでした。

「美」を求めて

実は、高校時代に岡本太郎さんの本を読んで感動し、かなり影響を受けましたが、その本の中に、「きれい」と「美しい」はちがうという言葉がありました。「美しい」はグロテスクなもの、不快なものなどもあって、「きれい」や「きたない」という分類には入らない、もっと深い意味を含んでいると書いてありました。そのことが強く印象に残っていて、大学4年の秋ごろに、本当に美しいものはどういうものなのだろう、それを見つけないあという思いが強くなりました。それで、翌年、文学部文化学科美学および芸術学専攻（現在は文学部美学芸術学科）の3年に移りました。

それから卒業までの2年間はとても充実した日々でしたが、その間には、本当に美しいものを見つけることはできませんでした。その後、ともかく生活しなければいけませんので、大阪にあるディスプレイの会社に就職しました。

その会社で、私は大きなデパートの仕事を担当することになりました。いろいろな仕事がありましたが、展示会や催しの会場をつくる仕事もありました。それは、たとえば宝石の展示会の会場をつくる場合には、その前日の閉店後に、その会場となる部屋で直前まで行われていた展示会、たとえば呉服の展示会にふさわしい部屋にしてあったのを、今度は宝石の展示会にふさわしい部屋に模様替えるのです。

その場合、角材や合板を組み立てて作った壁面に和紙を貼ったりして和風の部屋にしていたのを、作業する人たちが全部ばらして、外に運び出して、次には新しい角材や合板を持ち込んで、また壁面や仕切りを組み立て、そして今度は洋風の壁紙や布などを貼って、洋風の部屋を作り、照明なども工夫して豪華に見える展示会場にするのです。そこに何万円、何十万円もする宝石がきれいに展示されるのです。

そうした作業の中で、作り物を壊して運び出したりする最も汚く危険な作業をするのは、私が勤めていた会社の下請けに雇われた日雇いの労働者たちでした。

ある日、そういう労働者たちに働いてもらって、私が監督をしていたときに、一人の人が壊した廃材についていた釘を踏んでしまいました。血が出ているので、私が「病院に行こう」と言いましたら、「かまへん、かまへん、こんな傷、タバコの吸い殻をこすり付けといたら大丈夫や」と言ったのです。しかし、菌（ばい菌）が入って大変なことになってはいけなくて、説き伏せて病院へ連れて行きました。

ディスプレイの仕事のことを展示美術と言うこともありますように、私はディスプレイの会社に勤めて、いわば美にかかわる仕事をしていたわけで、その仕事は楽しくはありましたが、その仕事においては本当に美しいものには出会えないと私は思うようになっていました。

イエス様との新たな出会い

ところが、そんな仕事をしているうちに、本当に美しいものに気付いたのです。今お話しした日雇いの労働者たちを見て、このような弱い立場に置かれて、蔑まれ、虐げられた人たちと共に生きられた方のことを思い起こしたのです。それはほかでもないイエス様です。そして、そのような生き方をなされたイエス様に本当の美しさがあると思ったのです。私は、そのイエス様にもう一度深くかかわりたいと思い、大学院の神学研究科に入り、修士課程を修了して牧師になりました。

美しいイエス様と言いましても、新たに会ったそのとき以来今に至るまで、私が見つめ続けたイエス様は、頭に光輪をつけた光輝くようなイエス様ではありません。私は、実際のイエス様は、当時の熱心な宗教者たちがしばしば身を清めていたようなこととはならず、同じく身を清めることを疎かにするなどいろいろな律法の掟を守らずに、汚れた罪人とされてきた貧しい人たちや、ある種の職業の人たちや、病人たちと共に、汗にまみれ、埃だらけになる生活をなされていたのではなかったかと思えます。

そのイエス様は、熱心な宗教者や宗教的指導者たちから差別され、蔑まれ、虐げられていた人たちと共に生きられ、その宗教者や宗教的指導者たちを厳しく批判なさいました。そんなイエス様が多くの人びとに受け入れられ、人気が高まると、イエス様は危険人物と見なされるようになりました。

聖書に描かれている

イエス様

さっき読んでいただいた聖書の箇所には書かれていたのは、イエス様が安息日に片手の萎えた人を癒されたという出来事です。安息日は、神様が6日間で天地万物をお造りになって7日目に休まれたということ（勿論、それは神話ですが）記念する日で、安息日にはすべての労働を休まなければいけないと定められていました。今の暦で、毎週、金曜日の日没から土曜日の日没までが安息日です。そんな日に、癒しを行うことはとんでもないこととされていたのです。しかし、イエス様は、神様が人びとの命を軽んじたり、生きる喜びを奪ったりすることを望まれる筈はなく、人びとがいきいきと喜びを持って生きることを望んでおられることを確信しておられ、この日も、イエス様が安息日の掟を破る罪を犯すかどうかと見つめていた周囲の人たちに怒りを感じ、彼らのかたくなな心を悲しみながら、片手の萎えた人をお癒しになりました。そのイエス様を危険人物と見なすようになった人たちは、いよいよイエス様を殺す相談をし始めたと言われています。

イエス様は、そのような危険が迫っていることには気が付いておられたことでしょう。それでも、そうした生き方を変えることなく、徹底してその生き方を貫かれ、結局イエス様は捕えられ、ローマ帝国への反逆者に仕立て上げられて、ローマの最も重い処刑方法である十字架刑に処されて殺されたのです。

グロテスクに見える

イエス様

聖書に、鞭で打たれてから十字架に釘で打ちつけられ、さらに槍で脇腹を刺されたと言われているイエス様の姿は、見るに堪えない姿だったでしょう。16世紀のドイツの画家グリュネヴァルトの描いたイエス様が十字架につけられた姿の絵があります。イーゼンハイムの祭壇画と呼ばれているものの一つです。この絵を神学者のティリッヒは優れた宗教的絵画として高く評価していますが、そのイエス様の姿は一見グロテスクに見える姿です。しかし、見れば見るほど心を揺り動かされます。

けれども、絵がどうこうというよりも、イエス様が、弱い立場に置かれた人々を深く愛し、彼らに触れると汚れるとされていたことなどものともしないで共に生活し、彼らを苦しめる偏見や差別や搾取を怒り、権力者たちを厳しく批判し、闘い、最後には捕えられて惨めと言ってもいい仕方で殺されてしまった、そのすべての姿は、当時の絶対的な権力体制で固められていた社会においては、決して「カッコいい」ものではありませんでした。見様によれば、セルバンテスが描いたドン・キホーテのようです。また、ルオーという画家はキリストとピエロの絵をたくさん描いており、ルオーはその両方を同質の視点から見ていたと言われていますが、確かに、イエス様はピエロのように思えるところもあります。そのように「カッコいい」姿ではなく、異様で、最後にはグロテスクと言ってもいい姿でした。そのイエス様の姿に、私は心惹かれるのです。美しいと思うのです。そして、そのイエス様と共に生きる、あるいはイエス様に従って生きることが大切だと思っています。

神様が不在と思える世界

昨年3月に東日本大震災があり、大津波があり、原発の破壊による放射線被害がありました。被災者の方々の苦しみは今も続いています。その後もいろいろな災害がありました。ひどい交通事故もありました。世界を見れば、天災のほか、飢餓もあり、多くの争いもあります。多くの人が死に、傷ついています。

「神も仏もあるものか」という言葉がありますが、まさにそう思えるような出来事がしばしば随所に起こっています。アメリカにパート・D・アーマンという新約聖書学者がいま

す。彼の本が日本でも3冊翻訳されて出版されていますが、彼は、この世界にはあまりにもひどいこと、残虐なことが起っていることに気付き、全能なる神が支配するはずのこの世界で、何故か多くの人びとが苦しまなければならないのか、キリスト教はこの疑問に答えてくれないと考えるようになり、不可知論者となり、ついに信仰を捨てたそうです。

私も自分のいくつかの体験も含めて、この世のあまりにも納得がいかない出来事のことを考えると、この神学者の意見に同感せざるを得ません。しかし、私は信仰を捨ててしまっ
てはいません。というよりも、美しいイエス、この表現は私のアプローチの仕方からの表現ですので、一般的ではないかも知れませんが、とにかく、未だイエス様に心捉えられており、これからも拘（こだわ）り続けて行こうと思っています。

イエス様も

同じ世界で生きられた

そのイエス様は、聖書に書かれているように、自分の身に起こることをすべて知らされたうえで、それを使命として引き受けて、神の子と自覚して生きられたイエス様ではなくて（それは後の教会の筋書きだと私は思います）、実際のイエス様は、全く一人の人間として、時代的に2000年余りの違いはあっても、現代と同じく、到底納得がいかない出来事によって多くの人が苦しんでいる世界の中で、諦めるのではなく、しかし神様の力ですべてを変えることができると信じてでもなく、ただひたすら、苦しむ人や悲しむ人たちがいきいきと生きることができるために、それを妨げている様々な力と闘いつつ生きられたのだと思います。私たちは神様のことを勝手にいろいろと想像して何かかやと言っていますが、イエス様はともかくそういう生き方を神様のみ旨と信じて生きられたのだと思います。ですから、イエス様と同じには生きられないかも知れませんが、全くできないということではなく、私たちはそれぞれの力に応じて、イエス様と共に生きる、あるいはイエス様に従う生き方ができるし、そのように生きることが大切だと思っています。

イエス様を

見つけて生きる

私は今、日本キリスト教海外医療協会という団体のボランティア活動をしています。この団体が医師や看護師や保健師など保健医療従事者を送っているアジアやアフリカの国々、ネパール、パキスタン、カンボジア、バングラデシュ、ウガンダなどですが、その国々はいわゆる先進国の日本などと比べて大きな格差があります。それが端的に表れている一例は、子どもが1000人生まれたとして、そのうち5歳までに亡くなる子どもが2009年の統計で日本は3人ですが、ウガンダは128人、カンボジア88人、パキスタン87人、バングラデシュ52人、ネパール48人です。

そういった状況を少しでも改善しようとしているこの団体にも、いろいろな形で協力していただくことができます。使用済み切手を集めていただくことで支えになります。こんなことをしても、ほとんど何も変わらないのじゃないかと思えることもあります。イエス様を見つめつつ、「でも、しなければいけないのだ」と思わされています。

私は、これからも真に美しいイエス様を見つめ続けて生きたいと思っています。そして多くの人にそんなイエス様を見つめて生きていただきたいと願っています。

2012年5月16日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録